

フリーハンドなキャリアパス

希望半分・成り行き半分

池野 裕介

平成 20 年 3 月 学部卒業

平成 22 年 3 月 修士課程修了

1. はじめに

指導教官の重川先生からご依頼いただき、2023 年の同窓会懇親会にて僣越ながらスピーチをさせていただきました。またその内容を同窓会誌へ寄稿するお話を合わせていただきました。錚々たる先輩方が寄稿されている会誌で、特に何を為したわけでもない自分の記事をお出しするのは非常に恐れ多いのですが、同窓生の一人として卒業後の進路の一例を皆様に披露させていただき、同窓会の交流の一助となればと思い筆を取らせていただきました。

2010 年に修士課程を修了し、住友信託銀行（現・三井住友信託銀行）へ入社しました。大学院では重川先生のご指導の下でディリクレ形式に関して学びました。元々は数学者を夢見て大学進学したものの、自分の実力を含めて現実的なことを考えて、修士課程に進む際に就職する方向へ舵を切っていました。何か就職してやりたいことも具体的になく、数学にかかわる仕事に就きたいと漠然と考えていました。当時は生命保険会社所属されているアクチュアリー先生方による保険数学の講義があり、アクチュアリーとしての就職を何となくイメージしていました。2008 年 9 月にリーマンショックが起きた後の時期で、景気が落ち込んで就職活動が難しかった時期のためか、あるいは漠然と甘い考えであったせいか、なかなか就職活動はうまく進まず苦勞しました。何とか内定をもらった信託銀行でアクチュアリーを希望していたものの、希望は通らず、不安を抱えての船出となりました。

今となってはそんなものだろうと思いますが、そのように思えるようになったのは、卒業後の経験の賜物だと思いますので、順を追ってお話しできればと思います。

2. 初任店時代

初任店は大阪本店で法人営業の部署に配属されました。

数学教室の学生さんは営業を好んでやりたいと思うような気質の方は少ないのではないかと（個人的には）と思いますが、私自身もまさにそのタイプであり、非常に気の重いスタートとなりました。そんな風に考えていたところで他に選択肢もないので頑張るしかない、ということで自分なりに取り組んでいきました。

銀行といえば「融資」というイメージが強いですが、配属された部署では金融法人（地方銀行、信用金庫、etc）、学校法人、宗教法人さらには社団・財団を担当しており、融資による資金調達のニーズではなく、保有資金の運用や管理のお手伝いが中心でした。

学校法人の中には大学や大学の中の団体も含まれており、学生時代とは違って新鮮でした。当然のことではあるのですが、事業を進めるうえで様々な組織が関与し、物事が決まっていくという様子を自らもお手伝いをしながら関わることが出来ました。

営業なんて向いていないな、と思いながらの日々を過ごしましたし、全体を通してとても上手くいったわけでもありませんでした。正直なところ苦しんだ時期ではありましたが、結果的に自分では取り組むことのないような経験を出来た時期となりました。

3. マーケット事業時代と数学の使い道

2年半経った最初の人事異動で、デリバティブのトレーディング部署へ配属され、東京への転勤となりました。主に自社の顧客がリスクヘッジなどで取引を行う相手方になり、金融商品の価格付け（プライシング）を行い、取引で得たリスク（ポジション）を基に金融市場で取引を行い収益を得るトレーディング業務を担当しました。アクチュアリーの業務とは異なりますが、デリバティブの価格評価には確率微分方程式なども使うので、学生時代に学んだことを活用できる業務に関わることとなりました。ただ、相手は多くの市場参加者の思惑がひしめく金融市場であり、純粋な数学の問題というよりは実験的な問題となり、試行錯誤をしながらの業務でした。また、トレーディングでは毎日の終わりに損益という形で結果が見えるため、非常にチャレンジングでした。このころから業務でシステムを活用したり、自分でツールを開発する機会が増え、デジタル関連の業務に興味を持ち出した時期になりました。

その後同じフロア内で商品開発部署へ異動し、リスク分析システムの開発支援などに携わりました。開発プロジェクトの支援をするとともに、分析に必要な数理モデルの調査研究にも取り組みました。ここでは学生時代に学んだこととトレーディング経験をかけ合わせて、自分なりに方向性のあった業務に従事できた時期であったと思います。

この時期あたりから、FinTech という言葉が聞かれるようになり、ビットコイン・ブロックチェーン・機械学習・ディープラーニングなどの言葉が金融機関の中でも聞こえるようになってきました。

企業にいとある程度のサイクルで異動があり、商品開発業務を経験して3年ほどした2018年に銀行の債券投資を行う部署に移り、市場のリスク分析や定量的な投資戦略開発に携わりました。ここでデリバティブから現物の債券に直接関わるようになり、少し違う角度から金融市場に関わることとなりました。先ほど述べたトレーディングは顧客の取引を起点に取引を行い収益を得るのに対して投資では自分達的意思決定を起点に取引に入っていくので逆の立ち位置となりました。

ここまで振り返ると投資に関して顧客への営業から始まりその商品供給に企画、さらには自分も投資を行う側を経験し投資・資産運用業務に関して、川上から川下まである程度経験するようなキャリアとなっていました。

4. ブロックチェーンと米国留学

デジタル領域が徐々に社内でも注目を集めていく中で会社として社外との連携を進めるようになっていきました。そのうちの一つに米国ジョージタウン大学での研究プロジェ

クトへの参加があり、2019 年秋から研究員としてプロジェクトへ派遣いただくこととなり、ブロックチェーンの金融分野への応用についての研究に携わりました。渡米してまもなく 2020 年春にはコロナウィルス対策として行動制限（ロックダウン）が始まりました。外出は買い物に出かける程度で、全てのミーティングやイベントがオンライン開催となりました。



2 年間共同で研究を行った教授とは帰国前の送別ランチが最初で最後の対面での対話となり、それまで対面で行うことを「常識」として感じていた自分にとっては当初はとても不便に感じたものでした。

米国にいる意味は何だろうか、と思うこともありましたが、色々なことから距離を置いて物事を考えられる時間になりました。またオンラインが前提になったから、ブロックチェーンに限らず米国の時間帯で開催される勉強会にこっそり参加することもでき、自分の興味あることを広く学び直す機会にもなりました。

少し話が逸れましたが、自分の研究はデリバティブに関連する業務をブロックチェーン上で実現することをテーマにスタートしました。金融危機を経て、局所的な失敗がシステム全体に波及すること（システムミックリスク）を回避すべく集中清算を含めた制

度が導入されており、見方によってはそれ自身がブロックチェーンあるいは最近の言葉で言うと DAO(Decentralized Autonomous Organization) のような形態となっており、ちょうどよく見えたのが背景でした。実際に研究を進めていくと法規制というものは過去の失敗事例や課題から多くのことを学んでおり、そう簡単には置き換えることが難しいという事実を突きつけられる結果となりました。

その後は分散型金融 (Decentralized Finance、DeFi) についてのリスク分析を中心に研究を進めていました。DeFi ではブロックチェーン上でプログラムを実行するスマートコントラクトにより、金融機関を介さず金融機能を提供するプロジェクトが数々実装されていました。ビットコインをご存じの方も多いと思いますが暗号資産の価値上昇を背景に多くのサービスが提供され、中には非常に怪しいものもあるような状況でした。金融機関の目線からするととても危なっかしいものが多い一方で、ブロックチェーンに関わる方の中には中央集権的な考え方に対する反発を旗印に開発を進めるケースも見受けられました。新しい技術の研究とそれらを金融産業へ健全に組み込んでいくことを目指して事例の研究を進め、ステーブルコインと言われる通貨のような動きを目指したデジタルアセットについて要件を整理する論文をまとめることができました。

5. DX 業務とこれからに向けて

2022 年に帰国してからは DX 推進を担う部署と Trust Base というデジタル戦略会社

を兼職してデジタルアセットあるいはWeb3などブロックチェーンに関わる業務に携わっています。実務推進のサポートと、関連技術の検証を通して今後のビジネスのデザインをすることがミッションとなっています。

言葉遊びに聞こえるかもしれませんが、DX= Digital Transform ということで、必然的に「変革」が必要な領域です。技術を単に適用するようなデジタル化を超えて、業務を含めた社会課題をよく理解し、使える技術を活用して新しい世界を作っていくことである、と個人的には理解しています。そのためには新しい技術を追いかけて理解していくことと同時に、使い古した技術でもビジネスに最適なら選択することも必要です。そうした試行錯誤に取り組む中で、途中で舵を切った自分が語るのもおこがましく感じますが、こういうことが研究あるいは探求をするということだったのかもしれないと感じています。

外形的には研究者と呼ばれる立場ではないですし、世間に誇れるような成果といえるものは特になのですが、色々な立場をめぐる中でも自分なりに考えて何かやっていきたいという行動原理は大学でしっかりと学んだ成果だったのだろうと感じています。未練がましく数学の話題をチェックしたり、全然進まない読書も継続するなどしていますが、これらの仕事とプライベートの活動含めてある程度いい方向に進めたいと思います。

6. 結びの言葉

重川先生には大学院でのご指導のみならず、修了後社会人になってからの訪問を含めて連絡を取らせていただき、また同窓会の設立のご案内をいただき、参加させていただくことが出来ました。またこのような貴重な場をいただき重川先生には改めて感謝申し上げます。また同窓会の役員と事務局の皆様にはご多忙の中で継続的な同窓会活動を支えていただいていることをこの場を借りて御礼申し上げます。

同窓会活動の交流の一助になることを願って筆を置かせていただきます。

2024年6月